

時刻盤に16のみの懐中時計

日本エッセイスト・クラブ会長 大村 智

郷里の葦崎へ帰り、いつもの散歩道の悪路に差し掛かったところで躓き、転倒して右腕橈骨頸部を骨折してしまった。夕刻のこと、弟が救急車を呼んでくれ、幸いにして、葦崎市立病院の整形外科の担当医が帰宅寸前であったが、骨折から一時間も経たないうちに処置をしてくれた。この当初の処置が良くて、その後の適切な手術と相まって二ヶ月半もすると右腕も動かすことができるようになった。それでも外に出るのを控え、家の中での仕事をすることにして、以前から気になっていた雑多な書籍の整理を始めた。間もなく、積んであった本の間から、貴重な物を入れた箱が出てきた。この中に茶封筒に入れて保管していた懐中時計が入っていた。何年も前から見失っていたものが、こんなところから出てくるとは、どうした事か。

この時計は、川上哲治さんから拝領したものである。川上哲治と言えば、子供の頃は赤バツトの川上として崇め、野球仲間の憧れになっていた打撃の神様だ。巨人軍の監督として九年連

続日本一を達成。野球殿堂入り、永久欠番となる背番号16などと共に、話題に事欠かない、野球ファンなら誰でも知っている伝説的な偉人である。この大人物から拝領した時計の話は私の長いゴルフ歴にあつて、忘れられない自慢の話となる。

大分前のことで、その年月など定かではないので、古い手帳を引っ張り出して調べた。三十年余り前の一九九四年八月十七日に、長谷工の重役を務めていた友人の中村俊雄さんが誘ってくれて、長野県蓼科のフォレストカントリークラブ三井の森で川上哲治さんとプレーした折のことだ。嬉しさに加えて、下手なゴルフはやれないなどという緊張感を覚えながら川上さんと一緒にワンラウンドを楽しんだことが思い出される。

その時の記録が手帳に記入されていた。当時、私は五十九才で、霞ヶ関カンツリー倶楽部からハンディキャップ5の認定を受けてから何年も経たない頃と記憶している。つまり、私のゴルフ人生で最も気合の入っていた頃である。手帳にはこの日のスコアは、アウト38、イン39と記載されてある。その日の記憶を辿ると川上さん

はアウト39、イン38となる。つまり二人は同スコアでラウンドを終えたのであった。

手帳のこのスコアの記録を見ながら、当日のプレーの記憶が鮮明に浮かび上がってきた。スタートしてまもなく二人は真剣勝負を繰り広げ、次第に口数も減り黙々とプレーした。川上さん

の腕を見ると、私の二倍余り太く、体格などは私が子供に見えるようであった。川上さんは私より十五才くらい年長であったが、ドライバーで三百ヤード余りも飛ばしていたのに、私の方は二百ヤードそこそこで、私の二打目はロングアイアンやスプーンを持って川上さんを追いかけることの多い展開だった。幸いグリーン周りには私の得意とするところで、川上さんに離されず回ることができた。

プレーが終わったところで、川上さんが私に「風呂にでも入って三十分程待っていてください。差し上げたいものがあるから」と言い、車で近くの川上さんの別荘まで取りに行行って持ってきてくれたのが、この時計である。「今日は実に楽しいプレーができた。記念にこれを受けて欲しい」と言って、瀟洒な小箱に入った金の懐中時計を下さった。

この時計の文字盤は16（つまり四時）を示すのみである。16は読売巨人軍の永久欠番である。

この時計はその二年前、一九九二年に川上さんが文化功労者の顕彰を受けたことを記念してつくったもので、時計の裏面にそのことが刻まれている。

これを頂いた当時、ゴルフ仲間に見せびらかしていたが、電池が切れたので、大事に保管していたものが、いつの間にか書棚の雑多な中に紛れ込んでしまっただけの姿を消していたのである。骨折して気分も沈んでいる時だっただけに長年探し求めていた宝物の発見に小躍りして喜んだ。